

上越市立教育センター

242号

所報

令和4年11月4日発行

発行：上越市大字下門前1770番地

上越市立教育センター

所長 竹内 学

E-mail jecenter@jorne.or.jp

URL <http://www.jecenter.jorne.ed.jp>

学びに向かう力は育っていますか？

学習指導要領では児童生徒一人一人に「生きる力」を育成するために、各教科等において、実際の社会や社会の中で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間力等」の三つの資質・能力を育成することとしています。

これらの資質・能力は、児童生徒の内面にあるものですから、評価して指導に生かすためには、見えるようにする必要があります。その一つの手段が数値化です。「知識・技能」や「思考力、判断力、表現力等」は、工夫して数値で表すことができますが、「学びに向かう力、人間力等」は数値に表すことが困難です。教員の皆さんは、児童生徒の「学びに向かう力」をどのように評価し、どのように指導に生かしていますか。

本年度、全国学力・学習状況調査の項目に「学びに向かう力」の一面を捉えた「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」という問いがありました。「している」という肯定的な回答をした市内の小学校6年生は32.8%、中学校3年生は12.1%でした。

学校訪問をしていると、児童生徒のノートに花丸がついていたり、計算ドリルや問題集のチェックページに確認印が押されていたりして、教員の皆さんが丁寧な確認や指導をしている様子が伺えます。家庭で学習に取り組む習慣を身に付けさせようと、宿題を継続して出し、丁寧に取組状況を確認してくださる教員もいます。適切に評価してもらえることで、児童生徒は取り組む気持ちを維持しているかもしれません。しかし、児童生徒の主体的に「学びに向かう力」を育成するという視点で考えたとき、学校が管理する家庭学習への取組状況を「学びに向かう力」の評価としてよいか、その取組により児童生徒の自ら「学びに向かう力」の育成が阻害されることはないか、と問うことも必要と考えます。

発達段階を考えると学校の管理が必要な時期もありますが、学年が上がるにしたがって自分で計画を立てて学習できるようにしていくことが大切です。発達段階や個人差を考慮した上で、学校管理型から自己管理型の学習にステップアップできるような指導の工夫が必要であると考えます。

児童生徒が自ら学びに向かう力を育てるためのアイデアを出し合っていきましょう。

(担当 学校教育課副課長 田邊)

「所報」は、教育センターのホームページでも公開しています。ご覧ください。





学級づくりを問い直す～How?から Why?へ～



はじめに

学級づくりというと、How?(どのように学級づくりをするのか)のレベルで語られることが多いように思います。事実、ちまたにあふれる How-to 的な書籍には、学級づくりに悩む教師のニーズに応えるメソッドや技術が誰でも簡単にできるように紹介されています。

一方、Why?(学級づくりは何のためなのか)や What?(学級づくりとは何なのか)というレベルで語られることは、研修会でも職員室においてもなかなかないように思います。

学級づくりは、学力向上や不登校の解消を直接的に目指すためのものではありません。なぜなら、それは結局のところ、学校にとって都合のよい学級づくり、教師の思いどおりに子どもや学級を動かしコントロールする学級づくりになってしまう危険性があるからです。

かといって子どもを放任し、子どもに任せればよいということでもありません。そのためには、How?の前に Why?や What?の問い直しをしていくことが必要に思うのです。

私自身も、学級づくりは教師主義でも子ども主義でも成り立たず、だからと言って両者のバランスを取ればよいということでもなく、その矛盾からブレイクスルーできないという葛藤状態に陥っていた時期がありました。

Why? ～何のための学級づくりなのか～

そんな私を救ったのは、若い頃に大正自由教育に身を置き、池袋児童の村小学校を経て、日本独自の生活教育や綴方教育を牽引した野村芳兵衛氏(写真, 1896-1986)による教育思想でした。私は野村氏の教育思想から、支配でも放任でもない、教師と子どもが共につくるという学級づくりの道をようやく見いだすことができました。



野村氏は、「最も重要な教育内容こそ仲間作りであり、その仲間作りの焦点こそ相互の人格尊重による協力にある」と言います。

野村氏の言う「仲間作り」とは、仲良しこよしの関係作りでも全体主義的な集団統制でもありません。教師も目の前の子どもと同じように一人の人間としてあるがままに自分らしく生きて、子どもと一緒に「協働自治」に取り組みながら共に生きるということです。またそれは、「子どもたちと一緒に毎日の仲間作りに参加する」生活態度であり、「監督者として子どもを審判するのではなく、子どもに共鳴して一緒に学ぶ」という子どもと教師の協働的な営みでした。

What? ～何を中核に学級をつくるのか?何を学級づくりでつくるのか?～

私は、野村氏の「仲間作り」「協働自治」の教育思想に啓発され、「共に生きる」という概念を学級づくりの中核に据えて、「わくわく学習」(総合的な学習の時間)と教科と道徳を関連させながら学級づくりをしようと試みました。

次頁の図は、私が令和2年度に担任した大町小学校4学年の年度末懇談会資料です。その年の「わくわく学習」では、地球環境学校と協働しながら学習計画をつくり、中ノ俣の

自然の中での遊びや農業体験、地域の人々との触れ合いを通じて、「助け合う仲間」作りを進めていきました。教科学習では、伝達することだけではなく、対話することを大切にするようになりました。対話を通して「学び合う仲間」になって、一人一人が主体的に授業に取り組むことができました。道徳では、「考え合う仲間」となって、学級生活のルールを一緒に問い直していきました。そうやって、学級づくりと授業づくりを一致させながら、「共に生きる」という概念について考えていったのです。

先の懇談会資料には、一年間の学級生活を振り返り、「仲間作り」の成果を以下のように意味づけました。



教科…	何かを覚えたり、練習したりするだけでなく、「自分で考えをつくること」「仲間と教え合うこと」を大切にして学習指導をしてきました。何より、学ぶ意欲や学ぶ楽しさを実感し、自ら学びに向かおうとする子どもが増えたことで、学力数値も上がりました。
道徳…	教科書教材だけでなく、実体験や実生活を基とした身近な生活の問題や学年のテーマとした「共に生きる」「仲間作り」について対話し、自分の考え方や生活の仕方、既存のルールを見直してきました。「今の自分」を見つめたり、「なりたい自分」を見つめたりしました。
わくわく…	中ノ俣の自然・人々・文化等を一体的に捉えながら、自分たちの現代的な暮らしや生き方と比較して考えることができるようになりました。他者や自然と生きること、自分が生かされていること、利他に生きることなど、「共に生きる」上で大切な見方・考え方を学びました。

おわりに

先に述べたように、学級づくりは、教師と子どもが互いを認め合い、信頼・協力しながら共同の生活と共通の幸せ（ウェルビーイング）を創造していく営みであると私は考えています。本稿は一事例でしかありませんが、先生方の実践の何かしらの手がかりになれば幸いです。

（担当 学校教育課指導主事 高橋）

参考文献

◆野村芳兵衛(1973)『私の歩んだ教育の道』/◆山住勝広「教育の先人に学ぶ—野村芳兵衛—」『教職研修 2020.6』/◆富澤美千子(2021)『野村芳兵衛の教育思想 往相・還相としての「生命信順」と「仲間作り」』

夏期カウンセリング研修にたくさんの方から参加していただきました。感想を紹介します。

8月1日(月) コロナ時代の教育相談・生徒指導

講師 文教大学 教授 会沢 信彦 様

- ◇安心・安全な居場所づくりにおける教育相談の果たす役割、支援の基本としてのカウンセリングの心構え、子どもの好ましくない言動の解釈とその対応等が大変参考になりました。力で押さえる指導や過度な叱責をせず、指導のバリエーションを広げたり、にこやかに子どもと接したりすることなどを心掛けたいと思いました。
- ◇学校の役割を改めて考える機会になりました。中学生は、卒業後の進路選択もあり、不登校や別室登校の生徒の学習保障をどうするかが課題でもありますが、会沢先生の「心のピラミッド」の一番底辺にある「基本的信頼感」をもつことや「心のエネルギー」をためることを最優先に考えてもいいのだと確認できたことで、これまでの自分の生徒への関わりが間違っていなかったと思い安心しました。

8月2日(火) 発達が気になる児童、生徒の理解と指導・支援

講師 星槎大学大学院 教授 阿部 利彦 様

- ◇発達が気になる子どもたちの困り感を見付ける視点や支援方法など、具体的にお話をしてくださり分かりやすかったです。できないという結果にこだわるのではなく、なぜできないのかを考え理解することが大切だと思いました。動画を見て、その子に合った支援方法で支援できれば、こんなにも生き生きと楽しく過ごせるのだと分かりました。2学期から学んだことを生かしながら、新たな視点で子どもたちと関わっていきたいと思いました。
- ◇発達障害かどうかという視点ではなく、子どものアセスメントが重要だと思いました。目の前の子どもの実態を把握することは、適切な対応につながる大切なことであり、適切な対応についてはこの研修で学んだ内容を取り入れていきたいと思えます。学級経営の方針としても重要な内容で、大変勉強になりました。

8月3日(水) 愛着障害の理解と支援

講師 和歌山大学 教授 米澤 好史 様

- ◇愛着障害に関する研修は初めて受けたので、新しい学びがたくさんありました。話を聞いていく中で、発達障害との区別が難しいと思いましたが、背景にあるものを探ったり、本質を見極めたりすることの重要性を感じました。その子に合った対応を行うことができるように、今後も目の前にいる生徒に対して向き合っていきたいと思えます。
- ◇正しいアセスメントを行い、発達の問題なのか、愛着の問題なのかを見極めて対応することの重要性を学びました。支援する側が、視点を変えて関わってみることも必要だと感じました。子どもの行動の意味を考えながら、「後手」の対応にならないように、そして子どもの「安全基地」になれるように関わっていきたいと思えます。

冬期カウンセリング研修



12月26日(月) 認知行動療法による否定的感情との上手な付き合い方

上越教育大学大学院 准教授 田中 圭介 様

12月27日(火) 通常学級における特別支援教育～事例を通して学ぶ指導と支援～

新潟大学教職大学院 教授 長澤 正樹 様

12月28日(水) 不登校の予防と支援の実際～問題の形成要因と維持要因～

東京学芸大学 名誉教授 小林 正幸 様

多くの皆様のご参加をお待ちしています！詳細は配布済みの「職員研修案内」及び、先日配信(文書管理システム)した2次案内をご覧ください。